慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	恩師の遺言、「恪勤匪懈者為一善」
Sub Title	
Author	藤井, 徳行(Fujii, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.4 (2010. 4) ,p.179- 181
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	利光三津夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100428-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の批評が、やや解読しにくい「六朝風」と自称する筆跡で認められており、その筆勢は四半世紀前の私の学位審査の時と全く異なることがなかった。生前、先生はよく「学問・研究の上で、やり残したものはない」と仰っておられた。着手したものはかならず成果に結びつけ、形として残して来られた、ということであろうが、弟子の育成についても、見事に完結されたのであった。

片言隻語にこそ、よくその人となりが顕れるとも聞く。思えば私は、法制史の学問より遊び事のお付き合いのほうが深い不肖の弟子であったゆえに、先生に師事した三十有余年の間に、学内では窺いしれぬような珠玉のお言葉の数々に接する機に恵まれたことは幸せであった。その一々を記録しておかなかったことは悔やまれなくもないが、そうした類の史料が残りにくいのは世の常であり、にもかかわらず先生が往時の人物の心情をよむに巧みであつたことは、数々のご著書を繙くまでもなく万人の知るところである。

杏林大学総合政策学部長　松田和晃

恩師の遺言、「恪勤匪懈者為一善」

恩師利光三津夫先生が亡くなられたことを電話で聞いて俄かには信じられない思いであった。日曜日の夜、旅先のホテルで知らせを受けた。同じ週で五日前の火曜日の夜、先生に指導していただいた者が集まって長谷山彰君の常任理事就任のお祝いの会を開き、先生のお元気なお姿を拝見し、お話を聞いたばかりであったからである。

今にして思えば、先生はそこに集まった親しい者たちにお別れを言いにお出でくださったのではないか。そう思えてならない。ただそれに気づかなかったのは私が鈍いせいでもあるが、いつものように生活感のある闊達なお話であったからである。

先生に直接教えを受けることができたのは友人藤田弘道・寺崎修両君のおかげである。恩師中村菊男先生が逝かれて、すぐのことである。お家のことで言えば下落合の家に落ち着かれてからである。書いた論文を二階の書斎で見ていただきながらお話を伺うのである。先生は律

令制の研究者として数多くの論策を世に問われ、法制史学界に金字塔を建てられた。それは質が優れていたからであるが、一方論文の量も多かった。人よりも長く机の前に座り続けるのが私の特技だからと謙遜された。あるときは先生の独特の言い方で、世間の義理は欠きなさい、私は義理を欠いてばかりきた、とも仰った。言葉の表現とは裏腹に先生の弟子を思う優しさが伝わってくるのである。先生のおっしゃることはくせがあるというべきか心に沁みる金言が多かった。どれだけ勇気づけられ、生きる姿勢を正さずにはおれない言葉が多かったことか。巨大な恩師が亡くなられてはじめて失ったことの重みをかみしめている今である。

稚拙な研究のレベルの私たちを手塚豊先生の指導下に送りこんで下さったのも利光先生であった。厳格な指導で知られていた手塚先生が惜し気もなく又優しく資料取りから執筆に至るまで丁寧に指導して下さった。これも利光先生のおかげである。お二人の恩師の指導を受けるご縁がなかったら今の私はなかった。どれだけお礼を言っても言いすぎることはない。しかし、浅はかな私は先生の生前にそれを十分に言えなかったことが今ながら悔やまれる。

私が学位を頂戴してからのある日、先生からの郵便小包が届いた。先生の指導教授であり義父でもあられる瀧川政治郎先生が逝かれた後のことであった。瀧川先生からはかつて拙論の内容について何度かご自宅で親しくご指導を頂戴した。小包の中身は瀧川先生直筆の色紙入り額であった。色紙には「恪勤匪懈者為一善　平成元年九月十三日　瀧川政治郎」とある。額縁の右に先生が「贈呈藤井徳行君　先師遺品　利光三津夫」と添え書きして下さっているものである。

かくして怠惰な私を書斎の壁上にて二代の先師が日毎温かく見守って下さり、叱咤し、導いて下さっていることとなった。

先生が慶應義塾に就職された時には鎧を一領買い求めて記念とされ、以後少しずつ上品に買い換えられたことは有名である。先生は骨董の収集趣味があられた。古銭の収集をされたが、すごいところは趣味に終わらせず『古貨幣七十話』（慶應義塾大学出版会）という著書にされたし、古貨幣研究の権威と称された。骨董は中国のものが多く、目を見張るような鼎が、書斎の机脇で原稿用紙の反古入れになっていたりした。私も中国古代の古い銅釜を分けて頂き、国宝級のものが我が家宝になったと

思っている。

また、先生は門下生を友人のように可愛がられた。先生が最初の学長をされた常葉学園富士短期大学を一人で訪ねた時も大事な学問上の指導を頂戴したあとは、ご自分の宿泊ホテルを紹介して下さり、あちこち案内して下さって、忘れることが出来ない楽しいお話を聞かせて頂き、よい思い出を遺して下さった。二番目の学長をされた千葉県木更津市の清和大学時代も同じような思い出を頂戴した。まるで、自分の父親か先輩が単身赴任先を訪ねてきた息子や後輩を応対して下さるように温かいものを感じたのである。

先生、いろいろと有り難うございました。ただただ感謝です。

兵庫教育大学大学院教授　藤　井　徳　行